

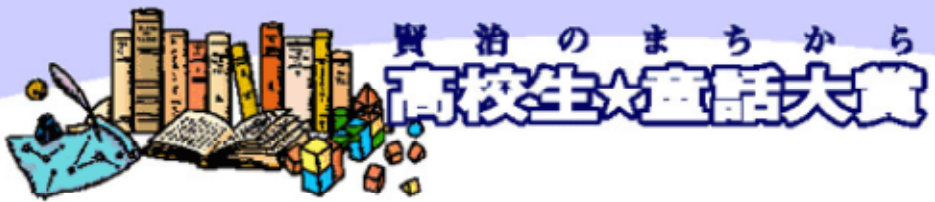
第14回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「蝉と花火」

千葉県 西武台千葉高校一年 山寺 杏奈



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『蝉と花火』

千葉県 西武台千葉高等学校一年 山寺 杏奈

「ごめん、覚えてないや」

親友である薄井仁は、そう言って困ったような顔をした。

仁がつい、この前の交通事故で、記憶喪失（そうしつ）になってしまったと聞いてはいたが、聞くのと実際に身をもって実感するのは違う。

坂木裕也が受けたショックは意外にも大きいものだった。

「本当に覚えてないのか」

やっと言葉に出た裕也の問いかけに、仁は申し訳なさそうに頷（うなず）いた。

いつもなら「嘘（うそ）だよ」と小馬鹿（こばか）にしたように笑うくせに、今日はどれだけ待っても、その一言を言う事は無かった。

家族のことも忘れていくというのだから、ただの親友でしかない裕也を覚えていく訳もなかったのだが、やはり、どこか覚えているのかも知れないと期待していた。

のんびり記憶が戻るのを待てばいいのかもしれない。

だが、裕也にそんな余裕と時間は残されていなかった。

訳あって残り七日間しか、ここに居られないのだ。

「なあ、今、時間空いてるか？」

今が長い夏休みだということもあって、七日間という短い時間でも、学校のある日と比べたら大いに時間はあった。

裕也の質問に、仁が「うん」と答えると、裕也は仁を引っ張り、出かけた。

二人で遊びに出かけた場所や、学校帰りにしたこと、そんなことを再現するうちにもしかしたら思い出すのじゃないだろうか。

裕也はそう思い立ち、仁を最初の場所へと連れて行った。

「暑い日はよく、この川で水遊びしたんだ」



小さい頃から、よく一緒に遊んだ二人は、夏の暑さでどうしようもなくなくなった時、この川に来ては服をびしょびしょに濡らし、母親らに揃って叱られていた。

びしょ濡れとまではいかないが、高校生になった今でも、暑い帰り道にぶらりと寄っては足を冷やしながら雑談し、ふざけ合った。

当時は大した思い出ではないのだが、今となってはそんな日常すら、大切なものだったと思える。

仁は、じつと静かに川を見つめていたが、やがて溜息を吐いた。

「ごめん、やっぱりわかんねえや」

「そうか……」

仁の答えに裕也は落胆したが、まだ初日ではないか、あと六日間もある、そう思い直した。

「じゃあ、もう日も落ちてきたし、俺は帰るよ」

「またさ、明日も付き合ってくれないか？」

「そうだな、どうせ暇だし、家に居ても仕方がないし、いいよ」
家族のことも分からなければ、安息の場所はないのだろう。

苦笑いで答えた仁に、裕也は早く記憶を取り戻さなければ、という使命感に駆られた。

「じゃあ、また明日」

「じゃあな」

そう言って去っていく親友の背を、裕也は時折、振り返りながら見つめていた。

さて、今日はどこへ連れ出そうか。

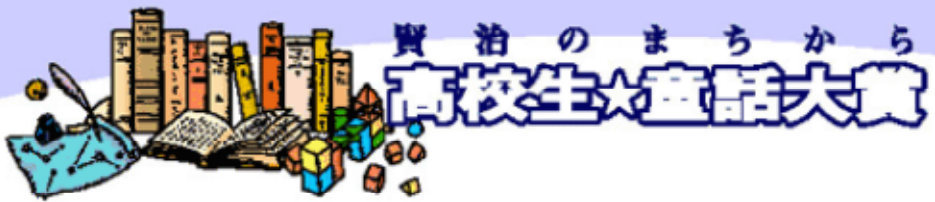
携帯でのやりとりで決めた待ち合わせ場所へと向かいながら、裕也は考えた。

仁にとって、そして裕也にとっても思い出深い所。

思い当たる節が多すぎて困った。

「おーい、こっちだよ」

かれこれ考えている間に、集合場所である昨日の川べりに着いてしまったようだ。



先に到着していた仁は、手を振りながらこちらへと駆けてくると、息を整えながら、聞いた。

「それで、今日はどうするんだ？」

「どうするかな……」

「どうするかなって、決めてなかったのか」

どこか、呆れたかのような言い方に、裕也は少し懐かしさを感じた。

たとえば、それが良いことだろうが、悪いことだろうが関係ない、素直に互いに言い合う。

裕也は仁のその呆れた言い方に、素直さを感じたのだ。

一歩ずつではあるが、進展はしていたのだろう。

「そうだなあ、仁は何したい？」

「うーん、少し腹が減ったかな」

そう言いながら腹をさする仁の姿に、裕也は次の目的地を頭の中で弾き出した。

「じゃあ、駄菓子屋なんてどうだ？」

そう問うと、仁は頷き返した。

二人は、ここからそう遠くない駄菓子屋へと、のんびりと話をしながら歩いた。

「覚えてるか？ 俺がお前の家に泊まった時、お前は寝相が悪すぎて、俺をベッドから突き落としたよな」

「え、そうなのか？」

「そうだよ」

そう笑いながら言っていると、仁はばつが悪そうに頭を掻いた。

「他にもあるぞ」

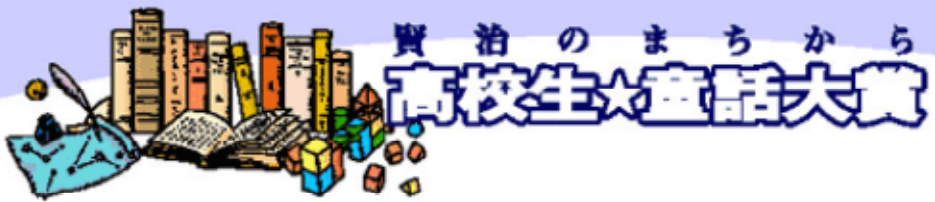
「まだあんの？」

「うん、後はな……小学校の時、好きな子が一緒に大喧嘩したな」

「本当か、それ」

裕也はどこか照れくさそうに頭を掻いた。

その様子を見て、可笑しそうに笑う裕也に、それにつられた様に苦笑いを浮かべる仁。



そんな思い出話のような、はたまた、面白話のような会話に花を咲かせていると、目的の駄菓子屋が見えて来る。

その駄菓子屋は、店の前に幾つかの古いベンチを置き、店の奥には店主である『駄菓子屋ばあ』と皆から呼ばれている、優しい（やさ）おばあちゃんが一人居るだけだ。

盗まれても気付かなそうな商品の並べ方だが、『駄菓子屋ばあ』の朗らかな優しい笑みがそうさせるのか、不思議と万引きされたなどの話は一切聞かなかった。

駄菓子屋の手前まで来ると、俺は立ち止まり、店に引き込まれる仁を呼び止めた。

「ちよっと待った」

「ん？」

不思議そうな顔で振り返った仁に、俺は歯を見せて笑いながら言った。

「いつも、ここで俺たちはジャンケンをするんだ」

「え、なんでだ？」

「あのな、ジャンケンして負けたほうが何か、駄菓子を奢（おご）る」

それが、毎回毎回、店の前でやっては勝った、負けたと騒いで笑っていた日常。

「へえ、面白そうだな」

「だろう」

確か、初めてこれを提案した時にも、仁は同じことを言った気がする。

そんなことを思いながら、裕也は右手で拳（こぶし）をつくった。

「いくぞ、最初はグー、じゃんけん」

「ポイっ！」

裕也が出したのはパー、そして仁は力強く拳（こぶし）を握（にぎ）り、グーを出した。

「だあ！俺の負けか！」

悔しそうに地団駄を踏む仁に、裕也は思わず吹き出して笑った。

じつをいうと、このジャンケンには秘密がある。

仁は、こういう何かを賭（か）けたジャンケンとなると、力が入るためか、高確率でグーを出す癖（くせ）があった。



そのことに本人は気付いていないのが、また滑稽^{こっけい}だったりもするので、あえて裕也は仁にそのことを教えることは無かった。

「じゃあ、俺はイカの酢漬^{すづ}けで」

「渋いんだな」

ぶつくさと呟^{つぶや}きながら店へと入って行った仁を見送り、裕也はベンチに腰かけた。

やはり、仁は仁だ。

少し恥ずかしいことがあると頭を掻く癖^{くせ}、悔しいと地団駄^くを踏む癖、さつきみたいなのグーを出す癖。

なんだ、意外と覚えてるんじゃないか。

この様子なら七日間という期間で記憶を取り戻せる。

そんな安心で機嫌^{きげん}良く座っていると、裕也とは正反対に少し機嫌^{きげん}を損^そねたような仁が、右手にイカの酢漬^{すづ}け、左手にはアイスキャンディを持って店から出てきた。

「お、ありがとう」

「どういたしまして」

イカの酢漬^{すづ}けを裕也に手渡すと、仁は並ぶように裕也の隣へと腰かけた。早速、裕也はイカを食べ、口をすぼめた。

「酸^{すっぱ}っぱい、でも美味^{うま}い！」

「酸^{すっぱ}っぱいのが好きっていう理由が分からないよ」

そう言って仁は、アイスの袋をペリペリと剥^はがす。

よく見れば、そのアイスは必ずと言っても良いほど、仁が毎回食べる物だった。

「知ってる？ お前、来るたびに、そのアイス食べてるよ」

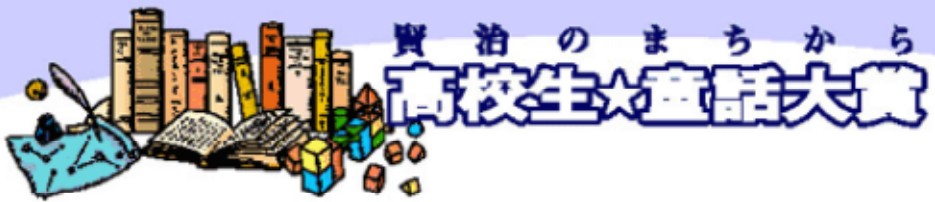
「そうなのか？」

そう言ってどこか納得^{なっとく}したように頷^{うな}く仁に、裕也は尋ねた。

「何？ なんか納得^{なっとく}気^げだな」

「ん、自然にこのアイスを手を取っててさ……気が付いたらって感じだから、もしかしてそうじゃないかと思ったんだよ」

「どうやら癖^{くせ}だけでなく、好きな食べ物までは自然と覚えているらしい。食い意地^{いきぢ}が張^はっているのか、どうなのか。」



「でもよ」

仁は、アイスを舐めたり、かじったりを繰り返しながら言った。

「何か、お前と居ると気楽でいいや」

「……記憶が戻ったのか？」

「いや、なんか本能的っていうか」

一瞬、戻ったのではと期待したが、そうではなかったらしく、裕也は少し残念がった。

だが、記憶がなくなるとも仁は裕也と過ごす時間を、特別に思ってくれている。それは少し、嬉しかった。

「な、明日も出掛けようぜ！」

「あー……ごめん」

予想外の答えに、裕也は仁の顔を凝視した。

「なんか、遠くの病院行くんで、四日間くらい家を空けるんだ」

「そう、なのか」

四日間。

そうなる後は七日目しか残っていない。

あと、たった一日という時間で思い出してくれるのだろうか？

そんな疑問が、裕也の不安を強く煽りながら、裕也は笑いながら「わかった」と返した。

最後の日。

今度は前回と違って、行く場所は決まっていた。

また、あの川べりに行くと、真っ暗な中で一人星空を見上げる、仁の姿があった。

裕也は、駆け寄って声をかける。

「仁！」

「あ！ まったく、いつも遅れるよな」

早速、文句を言ってきた仁に、裕也は「ごめん、ごめん」と謝ると、歩き出した。

「さ、行こうか」

「なんだよ、今日はやけに急かすな？」



「時間がないからね」

ぽつりと、呟くように言った裕也の言葉に、仁は不思議そうに小首を傾げる。

「時間がない？」

「うん、だから急ごう」

すたすたと歩きだす裕也に、仁は慌てて付いて行った。

しばらく歩くと、大きな川にたどり着いた。

いつもの川べりより川幅が大きく、立派な橋まで架かっている。

一体、裕也はここで何をしようというのか。

仁は疑問に思ったが、それを口に出す前に裕也は再び歩き出す。

立ち入り禁止と書かれた札を通り過ぎ、橋の上にまで来ると、裕也はようやく止まった。

「なあ、こんなところに来て何がしたいんだ？」

「まあ、いいから待っててみなよ」

楽しげにそう言うのと、橋の手すりにぴょんと飛び乗って腰をかけた。

仁も同じように手すりによじ登ると、裕也の隣に腰をかける。

橋の下は真っ暗で何も見えず、川の流れる音だけが勢いよく聞こえ、少し不気味さもあった。

仁は少し不安を感じていると、ふと、夏を感じさせる独特な音が聞こえてくる。

仁は驚きつつも、慌てて視線を空へと向けた。

「わあ」

ぱんつと乾いた音を立てて、綺麗な花を夜空に咲かせる花火。

次々と休む間もなく打ち上げられる花火は、本当に綺麗で、美しいものだった。

「なあ、裕也……」

すごいな。

そんな言葉をかけようとしたのだが、言う事はなかった。

いや、実際は言えなかった。



賢治のまちから 高校生★電話大賞

仁の隣に座る裕也の体は、まるで川の水のようにゆらゆらと揺れながら透けていった。

「裕也……」

仁は次の瞬間、大きく目を開いた。

裕也のことを思い出したのだ。

「ちゃんと思いついてくれたか？」

「思い出したよ」

仁は交通事故で記憶喪失になった。

だが、頭を打ちつけたものの、体にはほとんど傷がつくことはなかった。

轢かれるあの瞬間、裕也が仁を助けようとトラックの前から押し出したのだ。

そのおかげで仁は頭を打ったが、死までは至らなかった。

「お前は、生きてるんだよね？」

確かめようと仁は裕也の肩を叩こうとしたが、虚しく宙を掴んだだけだった。

「嘘だろ……まさか死んでなんかいないよね？」

「ううん、死んだんだよ、俺は」

信じられない話でもあったが、現に触れないとなると、どうにも信じられないという言葉で終わりそうにもない。

「ごめんな」

仁は思った。

きっと自分を恨んでる。

だが、裕也は明るく笑って答える。

「何が？ お前が俺に何かしたっけ？」

「ほら、俺があの時、飛び出してさえないなければ……」

「そんなことは、どうでもいいね」

あっけらかんとそう言ってみせる裕也に、仁は不思議に思った。だったら、どうして再び会いに来てくれたのだろうか？

「俺は、裕也が俺のこと忘れたままだったら嫌だな、そう思って来たんだ」



こっちに帰ってくるのは大変で、ようやく七日間のみ戻ることが許されたのだと言う。

「それに、ちゃんとお別れもいいたかったしな」

「そうだよな、記憶がないまま勝手に逝かれちゃ、俺も嫌だわ」
当たり前だと言わんばかりに裕也は笑った。

その時、一段と大きな花火音が鼓膜こまくを響かせた。

二人は、ほぼ同時に顔を目の前の花火へと向けた。

「この花火が終わったらさ、ちょうど七日間で、俺は消えちゃうんだ」
花火を見つめながら、裕也は少し寂しそうに言った。

「そうなんだ……」

「そう、だから二人で花火を見るのもこれで終わりだな」

その言葉に仁は少し鼻を詰まらせた。

この場所を見つけたのは小学生になりたての頃。

危ないからと、やはり母親に怒られていたのだが、それでもこっそり行っては二人で打ちあがる花火を称賛していた。

休むことなく次々と打ち上げられていた花火だったが、急にその勢いは消え、真っ暗な夜空だけが取り残される。

この後、最後の一発が打ち上がり、打ち上げ花火は終了する。

もうすぐ、裕也は消える。

「裕也」

「ん？」

「ありがとう」

「……こちらこそ」

どの花火より高く、そして大きな音と光を散らしながら、最後の一発が打ち上げられた。

花火が終わっても、仁は帰ろうとせず、目を瞑つむってその余韻よいんに浸ひたっていた。

その隣には、こと切れた蝉が一匹、空を見上げるかのように仰向けになっていた。